

夜這いの解体・村の崩壊

森 栗 茂 一

はじめに

- 1 明治寡占地主の形成
- 2 貨幣経済の伸展
- 3 子供の増加と賃稼ぎ分家
- 4 村の生活の変化

女の選択権のある夜這い

- 5 夜這いから料理屋へ
- 6 料理屋と没落地主
- 7 まとめにかえて

論文要旨

従来、民俗学では、性の問題を取り扱うことは少なかった。また、男の視点からのみ、議論が展開することが多かった。ここでは、水俣病の発生の問題を、地域共同体の崩壊のなかでみようし、とくに夜這いといわれる共同体的な性の交換制度の崩壊について、議論した。

明治に入って、日本の近代化は、新興寡占地主を生み、土地の集中をもたらした。貨幣経済の浸透とともに、土地を持たない農民の間では、相互扶助関係は崩壊し、性の相互交換としての男と女の助け合い関係としての夜這いが衰退した。

一方、工場を持たない天草などより貧困な地域からは、女が売りに出され、近代都市の周辺に売春街が形成された。男の心は、新興地主も、伝統的な旧家も、そして工場労働者も、売春へと向かい、そこに放蕩を繰り返し、没落していった。

それは、近代における人間の経済のエロチズムであったのかもしれないが、その行き着く先は、水俣病という自己破滅であった。
